

2020 東京五輪の「消えない」残像

満園文博

「2020 TOKYO オリンピック」は、世界を覆うコロナ禍の下、ほぼ1年延期の末に2021年7月23日開会式-8月8日閉会式の日程で行われた。さて、この特異なオリンピックは、果たしてコロナに勝ったのか？負けたのか？

この質問をぶつけられたとき、人は何と応えるのだろう。「1年遅れでも、ほぼ無観客でも、実施されたのだから、勝ったのだ」と応える人は間違いなく存在する。一方で、「1年遅れ、それも、ほぼ無観客、そんなものはオリンピックではない、負けたのだ」と応える人もまた、間違いなく存在する。

冬季1回を含め、過去4回のオリンピック大会を現地で取材、1972年ミュンヘン大会から、今回の東京まで、報道者としてオリンピックに携わった立場から「2020 TOKYO オリンピック・パラリンピック」を検証する。

◎ 9年前の歓喜から始まった

2020 東京オリンピック。手もとに、2013（平成25）年9月8日付の東京新聞（中日新聞）「号外」が残っている。黒地に白抜きの大きな横見出しは「2020 東京五輪」。その下に、これまた大きな縦見出しで「決戦 イスタンプール破る」とある。遠く南半球、南米アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会（IOC）総会（現地7日）で、夏季オリンピックの「東京＝日本開催」が決まったことを速報する号外だった。付け加えるなら、中部圏では題字を中日新聞として発行された。

この年に12歳だった小学6年生が、おおよそ20歳ほどになり、進学した人なら（人によって違いはあるが）大学生になっている者が多いはずである。そうなのだ、多くの学生にとって、先ごろ、コロナ禍の下、さまざまな問題点、記憶を残して去った2020（実際は2021）東京オリンピック・パラリンピックは、まだランドセルを背負った少年少女時代に開催が決まり、紆余曲折の末に、大人に差し掛かってから開かれた大会だった。

そもそも、開催都市（国）で「世紀のオリンピック」と言われるのは何故なのか。国際オリンピック委員会（IOC）の加盟国は、現在200を超える。だが、経済的、政治的、スポーツに対する考え方、意識の高さ（熟成度）といった、それぞれの国がかかえる社会的な背景から、すべての加盟国がオリンピック開催国として名乗りを挙げるわけではない。そんな中、8年前、東京（日本）は敢然と手を挙げた。

その背景にあるのは、オリンピックを開催できる都市・国としての誇りを世界に示すことである。さらに言い換えれば「スポーツのお祭りを一手に引き受け、世界平和に貢献出来る国」としての存在をアピールすることである。悪いことではない。その資格を十分に満たしているとして、加盟各国からの承認を得ることにほかならないからだ。

ここで、冒頭の記述に戻り、2020 東京五輪の開催決定を報じた号外に、筆者が寄せたコラム「新たな文化、遺産 後世に」の全文を紹介する。

2020年・東京オリンピアード。僕らは、新たな文化、遺産の構築者となり、時代の目撃者となる。



時は流れる。滔々とした流れの中に生きながらえたものを文化、遺産という。1964年10月10日、秋晴れの中、19歳の早大生、坂井義則が点火した第18回東京オリンピックの聖火は、まさに、敗戦国日本が世界に再び「日本」を印象づける炎となった。そしてそれは、半世紀近くを経た今も、文化として遺産として息づいているのである。

64年東京オリンピックは、世界の技と力をわれわれに見せつけ、同時に、スポーツを身近なものにした。この年、87.8%に達したテレビの普及率もあって、スポーツは茶の間にも飛び込んだ。各地に「教室」「クラブ」が生まれ、グラウンドなど公共の施設が広く一般に開放されるようになった。スイミングクラブや体操教室、サッカークラブ、エクササイズジムは、今や普通の光景

として存在する。ランニング人口は1000万人を超えるといわれる。五輪はスポーツ文化を日本に育んだ。

64年東京の日本選手団は355人。しかし、女子は61人に過ぎなかった。それが、昨年のロンドンオリンピックでは293人中、男子を上回る156人を占めるに至った。あの東京から始まった女子力の向上は、確実に日本の歩みを変えた。例えば、もし64年東京がなかったら、果たして今日の「なでしこ JAPAN」は存在したか。

あの日、聖火の最終走者となった坂井義則さんは68歳になった。「東京オリンピックは、選手だけのものではなかった。日本が再び世界に歩き出すエネルギーになった。いま一度、若い人たちにあの活気に満ちた日々を経験させてあげたかった」と話した。



2020年・東京・第32回オリンピックアード。新たな文化と遺産が生まれる。僕らは後世に何を残せるのだろうか。

少し長くなったが、必要性を感じて、全文をそのまま紹介させていただいた。おおよそ8年前、かつての1964年東京五輪を引き合いにして書いた、2020年東京五輪への「喜び」「希望」「前向き」のメッセージだった。筆者は私だが、当時、多くの人たちが同じような思いを抱いたものと受け止めて書いたものである。

久しぶりに、この保存紙をめくりながら、当時の「希望」を懐かしみ、この夏の「現実」をかみしめて愕然とする。

「希望」や「理想」といったものと、実際に訪れる「現実」の間に、往々にしてギャップが生じることを、人は知っている。しかし、これほどの世界的スケール、あるいは深さで、つらいギャップを味わうことは、稀なことだろう。「十年一昔」という言葉があるが、私が、それよりも短い、8年前に書いたコラムと、現実をつきあわせてみると、それが如実である。

●世界の技と力をわれわれに見せつけ、同時に、スポーツを身近なものにした→ほぼ無観客。テレビは多くの競技をくまなくカバーすることは出来ず、多くの競技が人知れず終わっていた。そんなありさまだったから、世界の技と力が、国内どころか、世界に伝わりきれたか、はなはだ疑問である。私は、期間中、国立競技場周辺はじめ、いくつかの競技会場周辺を歩いてみたが「競技場見物」の人々はいても「競技見物」の人々がない違和感は、誇張ではなく「異常」だった。期間中、外へ繰り出した人たちのカメラに収められたのは「世界の技

と力」「熱戦」「選手」ではなく、競技場や、場外での記念撮影がメインだったはずである。果たして、1964年大会当時と比べて、スポーツは身近なものになったか、はなはだ疑問である。

●スポーツは茶の間にも飛び込んだ。各地に「教室」「クラブ」が生まれ、グラウンドなど公共の施設が広く一般に開放されるようになった。→一般市民向けの新たな施設が、この五輪を機に新たに生まれる、あるいは生まれたというニュースを、ほとんど耳にすることがない。さらに、公共の施設が広く一般に開放されるようになった→コロナ禍にあって、それは逆の論調で伝えられ「不要不急の外出」は、大きく制限されたのが現実である。

スポーツはお茶の間にも飛び込んだ→確かに、お茶の間でしか観ることの出来ない状況ではあったが、果たして、64年当時の熱狂するお茶の間が、今回も再現されたか、詳しいレポートは持ち合わせていないが、はなはだ疑問である。確かに、競技によっては日本が熱戦を展開、活躍したシーンはいくつかあった。だが、先述したが、競技がくまなく放映されなかった状況もある。世界最大の総合競技大会を味わうには無理があった事実もある。

◎ 2020 東京の聖火に思う

●1964年10月10日、秋晴れの中、19歳の早大生、坂井義則が点火した第18回東京オリンピックの聖火は、まさに敗戦国日本が世界に再び「日本」を印象づける炎となった(冒頭)。……あの日、聖火の最終走者となった坂井義則さんは68歳になった。「東京オリンピックは、選手だけのものではなかった。日本が再び世界に歩き出すエネルギーになった。いま一度、若い人たちにあの活気に満ちた日々を経験させてあげたかった」(末尾)→この号外原稿には触れていないが、坂井さんは1945(昭和20)年8月6日、広島県生まれの人である。第2次世界大戦の史実に詳しい人、あるいは五輪史に詳しい人なら、坂井さんの生誕地、誕生日が深い意味を持つことが分かると思う。世界史上、連合国側により、原爆が実戦で初めて使われ、日本の敗戦が決定的になった日である。まさにその年の、その日、広島県(三次市、原爆の直接の影響は逃れた)で生まれたのが坂井さんだった。

坂井さんは、少年時代から陸上競技に親しんで成長。短距離の俊才として、鳴り物入りで早大に進学した人。日本代表候補として、最後まで選に残りながら、最終的

に日の丸のユニフォームを逃した若者だった。

現代もそうだが、オリンピックの聖火最終ランナーといえば、フタを開けるまで極秘にされることがほとんどである。開催国の人たち、あるいは世界中の人々を「あっ」と驚かせ、耳目を、これから始まるオリンピックという祭典に一気に引きつける効果は絶大だからだ。だから、開催を担う、ほんの一部のトップの人たちは、身内にも「最終ランナー」を明かさないとというのが「常識」になっている。

今から半世紀以上も昔、1964年当時も、この「伝統」は引き継がれ、聖火最終ランナーは水面下で決定がなされた。当然「知る権利」を主張するマスコミ各社は、水面下で「スクープ」合戦を繰り広げた。最終的には、某新聞社が、事前に「坂井青年」を探り当てたものである。筆者は坂井さん本人に、当時の状況をうかがっているが、ここには、詳しく書かない。ただ、ヒロシマに世界初の原爆が投下され、この人が、まさに、その日、その広島県で生を受けたというのが「キーポイント」だった。

坂井さんは、2014年9月10日、脳内出血のため、69歳で逝った。

さて、こちらはまだ最近のことだから、覚えている人は多いはずだ。テレビで「TOKYO 2020」の白いボードを持ち、「トキヨー」と口を開く紳士と言ったらお分かりだろうか。2013年9月7日（日本時間8日）、南米ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会（IOC）総会で、第32回夏季オリンピック開催地に、決選投票でトルコのイスタンブールを破った東京が選ばれた日の記録映像である。主役の紳士はジャック・ロゲさん（ベルギー）で、当時のIOC会長である。名前よりも、その「トキヨー」で有名になった人だが、この9月7日（日本時間8日）、自らが発表した東京・第32回東京オリンピックの閉幕を待つように、この世を去った。79歳だった。

ロゲさんに近くでお目に掛かったことがあるが、あの映像そのまま、エキセントリックな人ではなかった。1968年メキシコから3大会連続してセーリングの代表だったオリンピック。かつ、国内ではラグーマンとしても活躍したスポーツマンだが、人の前にしゃしゃり出る人ではなかった印象が強い。海の男、ラグーマン。余計なことは言わずに、強い意志力でスポーツを愛した人だと、関係者に聴いたことがある。

ロゲさんは、オリンピックを愛することでは誰にも負けていなかった。ロシアはじめ、各国ではびこったドー

ピングには毅然とした態度で臨んだことで知られる。この夏の東京五輪、ドーピング疑惑が収まらないスポーツ大国ロシアが、国の正式名称で大会に臨めなかったのは、このロゲさんの強い意思の表れと言われる。さらに、オリンピックに連なる、若者のための「ユース五輪」を創設したことで知られる。

さて、^{ひるがえ}翻って、今回の東京大会を、コロナ禍の下、反対論を押し切り、強力で推進した現IOC会長は、派手な行動、語りですっかり有名になったバッハ氏である。もう一人、かつて、1992年バルセロナ五輪当時の会長は、地元スペイン出身のサマランチ氏だった。バルセロナ大会を前に、東京でお目に掛かったことがあるが、大変に饒舌な人だった。

ロゲ氏は、よく目立つこの二人の間に挟まれて存在したIOC会長だった。バッハ氏に会長職をバトンパスした後は、多くを語らない人ではあったが「コロナ禍の東京オリンピック」をどう考えていたのか、知るよしもないのが残念である。

アスリートから、テレビ局へと進み、ジャーナリストに転身した坂井さんは、生前、東京オリンピックを「若い人たちに見て欲しい世界の平和のお祭り」と称したが、コロナ襲来を知らずに世を去った。一方、ロゲさんは、コロナ禍の下、強行された東京大会の終わりを待つようにして逝った。モノ言わぬ先人たちの声は、もう聞こえて来ない。だが、彼らは、情熱を持ち続けたオリンピック・ムーブメントに終焉が訪れないことを願っているはずである。

◎ コロナが産んだ「アスリートファースト」の虚言

話は変わる。観客のいなかった「スポーツの舞台」を思い返して欲しい。ほぼ無観客のオリンピック、そして一部で、学校教育の一環として、児童・生徒が見守ったパラリンピックなどが、かろうじて思い起こされる。開閉開式を含め、ほぼ無観客のままで終わった両イベントだった。そこに、大会開催の意義はあったのか？ こういう指摘は、夏の大会が去り、秋になっても、様々な機会を捉えて続いている。

以下、分かりやすい観点から、ここではオリンピックに絞って論じたい。確かに「人生をかけて、オリンピックを目指したアスリートにとって、開催することには大きな意味があった」「中止、さらなる延期になっていたら、千載一遇の出場チャンスを失ったアスリートが出ていたはず」「全盛期を逃し、メダル獲得、あるいは入賞

のチャンスを失った選手が出ただろう」などと、無観客でも開催したことに意義はあったとする見方がある。筆者は、この言い分に異は唱えない。むしろ納得が出来る。

しかし、アスリートの多くが、それで十分にオリンピックを味わったかと言えば、それはまた別の話である。と考える。果たして彼らの多くが、存分に力、能力を発揮出来たと言いつけるかどうかは疑問である。このことは、各競技団体が、それぞれに出場選手全員を対象に調査していただきたいと望む。世界最大の規模で行われた総合大会が、ほぼ無観客で行われたことは異例中の異例である。この異常事態下、参加選手はいかなる状況にあったのかを、資料として留めることは極めて重要なことだと考える。

さて、私は「観客とアスリートファーストの相関」は、決して無視できないものとする。これは、いい慣らされた言葉だが「人は一人では生きていけない」——に通じるのではないか。私は、無観客下の競技を否定し、応援者の存在の重要性を言いたいのだ。

大会中に遭遇した、あるエピソードを紹介する。

今回のオリンピック、人気種目であるマラソンは、男女とも札幌市で行われた。世界中に大都市東京を大々的にアピールする千載一遇のチャンスと見た東京は、暑さ対策に精を出し、路面温度の上昇を抑える研究を続け、日陰を得る街路樹の整備などに取り組んだ。それが、IOC主導で唐突に札幌に変更されたといういわく付きのマラソンであった。しかし、このことについては、今回は深く探求せず、別の機会に論じたい。

「観客とアスリートファースト」についてのエピソードに話を戻す。女子マラソンは8月7日に行われた。その数日前、若い女性記者から私のもとに電話が入った。オリンピックの1年延期が決まると、アマチュア競技を中心に取材していた東京本社から、中部圏の本社に異動して、社会部に在籍していた。彼女は、いわゆる「オリンピック要員」ではなくなっていた。その彼女が、新聞社でスポーツ系OBである私に切り出した。

「取材カードはありませんが、外野席から女子マラソンを取材したい」。彼女は、大学時代まで陸上部に所属していた元アスリートである。そして、その先輩に日本代表の一人、鈴木亜由子がいた。彼女を応援のかたわら、取材もしたいという「訴えかけ」だった。これには、伏線があった。鈴木亜由子は、前回リオ五輪では、トラックの長距離代表として出場。直前の故障もあって満足な結果を得られていなかった。そこから巻き返し、

東京ではマラソンに転じて、3人しか選ばれない代表権を得た努力家である。初マラソンとなった2018年8月の北海道マラソンでいきなり優勝。翌19年9月、2度目のマラソンとなった東京五輪の最終選考レースの一つ、グランドチャンピオンシップ東京大会で2位に食い込み、五輪切符を射止めた逸材である。

この女性記者が、五輪専門記者に一時復帰してまで札幌に赴きなかった理由は他にもあった。まだ駆け出しスポーツ記者であった年、札幌で初めてマラソンに挑んだ鈴木を現地で取材。前述のように、この記者の前で先輩・鈴木は見事に優勝した。その日、この記者は、ヒロイン原稿を書き、加えて「先輩と私」なる記者コラムで紙面を飾った。

喜んだのは、この記者だけではなかった。鈴木もまた、後輩に励まされるように優勝のテープを切った。いいときの印象は、いつまでも心に刻まれるものである。鈴木にとって、この記者は「身内」の役割も果たしていたと考えられるのだ。マラソン走者は、確かに自分の脚で走る。だが、外から受ける精神的な支え、つまり応援は、大きな力になり得るといふことなのだ。それが、よく知るもの、例えば「身内」からのものであれば効力はさらに大きい。この後輩記者は、鈴木初マラソン時の成功を胸に刻んでいた。だから、オリンピックで夢よう一度と、札幌行きを願ったのである。ちなみに、私は管理職OBではあるが、もはや彼女に、取材地指令までは出せない立場である。それを承知で、訴えたかったほどの心境だったのだろう。

一旦、もう少し考えなさいと諭して電話を切ったが、翌日再び、この記者から電話が入った。しかし、そのトーンは、明らかに変化していた。彼女は言った。「亜由子先輩の実家に電話したら、両親、お祖母さんたち家族は札幌へは行かないそうです。だから、私も行かないことにしました」。コロナ禍にあって、この家族は、娘への気遣いから現地入りをあきらめたのだった。ちなみに、鈴木は、この10月に30歳の節目を迎えた。つまり、20台最後のオリンピックだった。

結果から言えば、女子マラソン、鈴木亜由子は19位となって、入賞を逃した。スポーツの世界に「たら」「れば」は禁句とされるが、果たしてそうなのかと、私は思う。あの沿道に、鈴木が両親、祖母、後輩らの姿を見つけ、声援を受けていたら、果たして結果はどうなっていたのだろう。それは、変わらなかったかもしれない。だが、その順位を下回ることはなく、もしかしたら、もう少し上位でゴールしていたのではないかと思う

のである。

繰り返すが、アスリートファーストは、選手への身体的サポートだけに止まるものではないということだ。精神的な高揚感を含めたサポートの重要性を考えるべきだと思うのである。

私は、オリンピックに限らず、数十年のスポーツ現場の取材経験から、いわゆる「地元」アスリートの健闘ぶりを目にしてきた。当然、よく知った「地の利」「気候の利」も有利に作用するだろうが、それより、アスリートの心身を最高に導く「家族・仲間・身近な人たち」の存在が、とても大きいと考える。アスリートファーストを謳うなら、今回のオリンピック・パラリンピックで行われた無観客試合・ゲームは、アスリートにとって、大変なマイナス要素になったと考えている。妻や子、親、友人、仲間のいない、さらに観客もいない競技場で、アスリートたちは孤独とも戦わなければならなかった。スポーツは、行う者、応援する者たちが一体となって成り立つものだというのを、あらためて確認した2020東京オリンピック・パラリンピックになった。

そして思う。オリンピックを、オリンピックたらしめているのは、そこに競技を見つめる人々の「目」があるからだということ。だが、有観客で行われるオリンピックでも、入場者数は限られ、多くの人たちはテレビを通して観戦、応援する。しかし、限られた人たちとはいえ、そこに満員の観衆がいるのと、まるでいないのではアスリートを鼓舞するエネルギーには雲泥の差があるのは間違いない。

私は、冬季1回を含め、4度のオリンピックを現地取材した。今回の2020東京でも、新聞に何度か原稿を書いた。しかし、これを取材したオリンピックの一つに加えられないことに決めた。競技するアスリートに、満員のスタンドが共鳴、呼応し合う様を見ることがなく過ぎ去った、200を超える国・地域が大都市・東京に会した、単なる規模の大きな総合競技大会だったという認識である。

◎ 安堵と苦汁の混ざったメール

東京オリンピック・パラリンピックがすべての会期を終えた9月のある日、私のパソコンに「お世話になりました」と題した、メールが入った。差出人を特定するわけにはいかないが、かなりの長文で丁寧な言葉が並んでいた。私の知る、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会のトップの部類に位置する人からだった。

私は、オリンピック現場取材のほか、五輪研究を長年

細々と続け、これまで、いわゆる「オリンピック本」を3冊著している。そんな経験から、世界中がコロナに蹂躪されている最中のオリンピック開催については疑義を呈して来た。世界中から、アスリートがスムーズに出国し、無事に日本入り出来るか。もし出来たととしても、満足なトレーニングは積めているのか。競技によっては、予選会の方法が変更されたものもある。受け入れる日本側に、本当にコロナに対抗する力があるのか。国内のコロナ禍に四苦八苦している現状から危険は充満していると見た。そんな中、開催に向けて一歩も引かないIOCバハ会長に呼応するように、我が国の首相は口癖のように「安心・安全な大会を」と繰り返すばかり。そこに具体性は欠けていた。そんな状況を背景に「オリンピック＝世界最大のお祭り」が開かれることの危うさを、私は強く感じていた。だから、紙誌に「中止論」「延期論」を展開していた。

さて、この項の冒頭に戻る。届いたメールには、時候のあいさつに続いて、いきなり苦悩の様が綴られていた。「『難しいプロジェクトだった』と簡単に一言で片付けることができない、今でもこれからもこうした経験はないと思われるプロジェクトでした」。2014年11月、某組織から出向して組織委員会入り、約7年にわたって、オリンピック・パラリンピックに携わってきた、いわゆる中間管理職である。この人とは、コロナ以前は良好な関係を続けていたが、コロナ後は、疎遠になっていた。それは、オリンピック・パラリンピック開催に対して、意図するところがプラスとマイナスで、方向性が全く違うから仕方がなかった。それぞれ、信じるころがあつての思考だから、何も恥じるころはない。

この人は、日程を消化、無事閉幕に結びつけたことに安堵しながらも、今回のコロナ禍のような事態に対応する方策の必要性に、しっかり踏み込んでいる。

開催に力を尽くした人にも、これに反対した人にも、一度は幕が下りた。だが、降りたのは2020 TOKYO・パラリンピックの幕だけである。この両大会の開催が、果たして妥当だったのか、否だったのか。検証の幕はいま上がったばかりである、と私は考える。結論は、おそらく簡単には出まい。もしかしたら、永遠に続くテーマであり続けるかも知れない。それでもいい。忘れてはいけない「無観客下、コロナ下のオリンピック・パラリンピック」が行われた事実は「人類の遺産」として留め置かれなければならない。

◎ 小さなオリンピックと橋本聖子さん

オリンピックは、大都市だけで行われるとは限らない。1992年、フランス・アルプスの山ふところで行われたアルベールビル冬季五輪は、人口わずか1万8000人足らずのアルベールビルの町で開閉会式が行われ、スピードスケート、フィギュアスケートなどが行われる主会場になった。夏季より、出場選手、取材者は少ないとはいえ、オリンピックはオリンピックである。この小さな町で各国からの宿泊者は収容しきれず、私は近郊の町に宿舎が割り当てられ、定時に運行される無料報道バスが貴重な「脚」になった。余計な事を書くが、開会式を目前にしたある日、私は盗難に遭った。宿泊ホテルの部屋に泥棒が入り、現金の大半が消えた。チェックイン時に、宿泊日数分の宿代は払い込み済みだったとはいえ、まだ、開会していないオリンピックを前の打撃は大きかった。

しかし、私は取材をやり終えることが出来た。難を逃れた幾ばくかのお金と、日本から現地に入っていた同業他社の仲間たちからのカンパはありがたかった。昼食用にと、ホテルの食堂から持ち出すパンや副食品を、従業員らはウインクして見逃してくれたものである。なぜ、貴重な誌面にこのような話を書くか。それは、あいさつや笑顔「見て見ぬふり」で遠来の客をもてなす、オリンピックの持つ温かみを記したかったからである。それだけ、余計に印象に残るオリンピックとなったが、幸運にも、この大会は日本選手の健闘が光り、貧乏記者の支えになったのである。

そんな中に、忘れられない人の活躍がある。橋本聖子さんである。スポーツの世界から政治の世界へと、うまくカーブを切り、力強くペダルを漕いだ人である。そして、元総理大臣・森喜朗氏の女性蔑視発言→辞任を受けて、あっという間に、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会のトップ（会長）に就いたのは記憶に新しい。橋本聖子選手は、冬季五輪は、スピードスケートで、1984年サラエボから94年リレハンメルまで4大会に出場。夏は自転車で、88年ソウルから、既に参議院議員となっていた96年アトランタまで3大会に出場した、まさに「鉄の女性アスリート」だった。

合わせて7回の五輪出場は、日本女子最多の記録ホルダーである。そして、獲得したメダルは、あの92年アルベールビル大会のスピードスケート1500メートルで獲得した「銅」1個だけである。実は、このメダルは、日本女子が冬季五輪史上で挙げた記念すべきメダル1号となった。リンクは、珍しい屋外だったが、この大会を

最後に、以降の五輪スピードスケートはすべて屋内で行われるようになっていく。その意味でも、記念すべき大会を取材したのだと、一人自負している私である。思えば私は、自転車で挑んだ、夏の88年ソウル、92年バルセロナ、96年アトランタ五輪、そして、冬のこのアルベールビル五輪と、橋本さんが出場したオリンピックを4度取材する機会に恵まれた奇遇に思いを馳せる。そして今回2020東京では、主催国トップの指導者となった彼女を見ることになった。

選手として、7度^{たび}もオリンピック選手としての重圧に耐えた人である。それが、今年は、めぐりめぐって、コロナ禍の下で、東京オリンピック・パラリンピックの主催国トップとしての重圧にさらされた奇遇――。

橋本聖子さん、北海道の酪農家に、1964年10月5日に生を受けた人である。10月10日の東京オリンピックを目前に生まれた娘は、聖火にちなんで「聖子」の名を与えられた。オリンピックの申し子が、コロナ禍の時代、日本の舵取り役になった不思議を思いながら、筆を置く。